都留市史

通史編

関東大震災と郡内地域　大正一二年九月の関東大震災のさいに、郡内各地は大被害を受けている。在郷軍人会谷村分会の記録には「九月一日午前一一時五八分四五秒、突如トシテ大地ガ震動シタ」と書きはじめている。記録には引き続き「当地ニナリテモ家屋瓦落道路ハ亀裂ヲ生ゼシ所数知ラズ、余震ハソレカラソレト走馬灯ノ如ク何時止ムルヲ知ル由ナク」と記している。山梨日日新聞も谷村町の被害を次のように報じている。「県立工商学校は大損害を受け約一〇万円に及んでいる。同町仁科又蔵方の火薬庫も半壊した。東電谷村発電所も壁に亀裂が生じ送電を中止し、谷村電燈発電所も水路に故障が生じ送電不能となり、同町下町斉藤勝治方の土蔵も半壊となった」（九月一一日）。この記事によると、県立工商学校や発電所施設の被害などから、容易なものでなかったことを知ることができよう。

震災の被害

谷村町だけでなく、東電の鹿留発電所も全壊し、重傷が三人も出て送電が不能になっている。禾生村でもやはり駒橋発電所に送水する田野倉水路も破壊し、桑園や家屋に浸水し、谷村町に通じる落合橋も危険になっている、としている。宝村でも小学校と役場が半壊し、中津森で少年が落石で死亡しているという。

こうした公共施設の被害に象徴されるように、耕地や集落の被害は大きい。神奈川県よりの地域に被害は多く、東桂村の御正体山や鹿留山を中心にして山間部は縦横に亀裂が生じ、土砂が流出し、耕地を埋没したもの少なからず、と報道されているが、特に忍野や平野の耕地、倉見や東桂の境の被害は大きく、境の場合は人家が一五、六戸も埋没したという。

山梨日日新聞の特派員は、被害地の東桂村の実況を次のように伝えている。

東桂村に入る。此処も地震はよほど強かったものと見えて、平地の此処彼処には大小の亀裂が生じている。傾いた家、屋根を壊された家、壁を落とされた家、その凡べてが大被害を受けているが、既に震後日も経ったこととて、何れも曲がりなりにも整理されている二、三の土地の人に聞いて見れば、只恐ろしかったと云うて言い合わしたように身震いをする損害も決して少なくないというのみで、凄惨なる当時を追想するだに厭わしいのか、その模様を詳しく語る者もいない。

被害状況を視察しつつ鹿留発電所に行く、煉瓦造りの発電所は無惨にも大破して、機械は天井の下敷となって壊れ、到底使用得られそうもない。外廓には亀の甲のように大ヒビが入り屋内の天井は墜ちて惨憺なる光景を呈している。聞けば第一回の強震で大破し係員一同は逃げだしたが、やむを待って再び屋内に入った時に、更に第二回の強震に見われて、逃げ遅れた三名は墜落した天井に圧せられ、二名は惨死し、一名は重傷を負ったとのことである。此付近も亦亀裂は甚だしい、殊に見る限りの沢辺に添う山腹は崩壊して耕地を押し流している。

こうした新聞報道のように被害が甚大というなかで人々はどう対応したのだろう。在郷軍人会谷村分会の記録には「此の日は何れも野宿をなし、不安の一夜を明かす、この夜在郷軍人青年団消防隊は協力して、人心を安れず可く夜警に努む」と記されている。町村ではどのような対応を見せているのだろう。谷村町での対応を見ると、町当局は青年団、在郷軍人会、消防団の三団体と協議し、救護本部を設置し、自転車隊をもって伝令に当て、町内全般の連絡を取り、救護、救済、警戒の任に当たっている。この地震の後には物資の欠乏が襲い来るに違いないと、米の手配を行い、米穀商の町会議員などによって、その時の相場で町内の米を買い占め、必要に応じて小学校の庭へ持ち出して売ることにした。青年団員は、メガホンで「米は沢山あり、入用な人は学校の庭で売っています。一升××銭です。これより高く売る店があったら本部までお知らせ下さい」と宣伝して回ったという。取り敢えずの対応のなかで不幸な事件も発生している。在郷軍人会谷村支部の記録は、九月二日の被害の状況、混乱した状況を記したあと、九月三日に次のように記述している。

午前十一時半在郷軍人ハ武装シテ谷村小学校庭ヘ集合スベシノ報ヲ発シタ、時ヲ同ジウシテ警鐘ハ乱打サレ、消防隊ハ手ニ武器ヲ持チ順次繰リ出シ、校庭ハ僅カ一瞬ノ間ニ武装シタ在郷軍人消防隊青年団町有志ニヨリ立錐ノ席モナイ様ダ、不逞鮮人の襲来々々一日以来ノ震災ニヨリ少ナクモ怖レオル町民ハ既ニ絶望ヲ唱エテオル者モアル、彼ラ不逞鮮人ハ糧食ノ略奪ヲ逞フシ全ク暴行ヲ極シウシ、当谷村ニ向ッテ進行シツツアリ、既ニ開地村ニテハ二人ノ殺者ヲ出セシヲ目撃ナシタリトノ報告モアリタリ、尚彼等ノ一軍ハ無慮二千人ナリト、此レガ為メ当分会ニアリテハ決死隊ヲ組織シ、開地方面ニ前進セシメ第二戦予備隊ト各々区所ヲ定メ、応援隊ト協力専ラ襲来ニ備エタリ、ソレカラソレト情報ハアリシモソレラシキ者更ニ見当ラズ、午後六時防備線ヲ解キ漸々ニシテ道志村々長ノ報告方法ノ間違イヨリ生ゼシヲ知ル。

関東大震災直後の混乱した情報に基づいた過剰な反応が地域のなかに生じた様相を、この在郷軍人会分会の記録はなまなましく描いている。この道志村長の誤報というのは、山梨日日新聞の記事（一〇月二七日）によると「二鮮人を二千人と聞き誤り」という谷村町側の受け止め方から生じたものだとも記されている。

地震直後の問題は、各地の情報を入手しようにも交通通信が一切途絶していたので各地の様子が全くわからないことであった。そのため京浜在住の出身者の安否探索救護のために、在郷軍人会分会は町役場などと協力して谷村町救護団を組織して出京して調査にあたった。九月一二日に出発して谷村町に救護団が帰ってきたのは同月一九日であった。